

榮山江上流域における 馬韓初現期の集落編年と意義

硬質無文土器の段階を中心に

The Chronology of the Settlements of Early Mahan Period
in the Upstream Area of the Yeongsan River and its Significance:
Focusing on the Stages of the Hard Mumun Pottery

鄭 一

JUNG II

はじめに

①これまでの研究動向および年代論

②馬韓初現期の集落資料

③集落の編年と意義

おわりに

【論文要旨】

本稿では、榮山江上流地域において、馬韓初現期に比定できる硬質無文土器段階の集落の編年と意義について検討した。まず、この段階の典型的な複合遺跡である海南郡谷里貝塚出土の土器について、これまでの研究成果に基づきながら、編年案を提示した。次に、近年議論が盛んな原三国時代の住居の実態について、1～3段階の硬質無文土器の段階ごとに検討を行った。

1段階は硬質無文土器が三角形粘土帯土器と共伴する段階で、紀元前1世紀～紀元前後の時期と推定した。松菊里型住居が退化した無施設型の住居が、光州地域を中心に営まれるようになる。

2段階は硬質無文土器単純期であり、紀元前後～2世紀中頃と推定した。円形、方形、楕円形などの住居の平面形があり、堅穴群がある程度群集し、溝状遺構なども確認される。注目できるのは、中心的な居住空間である平洞遺跡と、対外交易の中心地たる新昌洞遺跡の存在である。おそらく、これらの遺跡が位置する地域が様々な文物を外部から受容し、それを周辺部へ拡散させる中心的な役割を担ったと考えられる。

3段階は硬質無文土器が打捺文土器と共伴し、典型的な三国時代住居の内部から出土する時期であり、紀元後2世紀中頃～4世紀代と推定した。

いまだ、硬質無文土器の資料は、光州や潭陽を中心とした集落遺跡からの出土がほとんどであり、周辺地域の資料が不足している。それゆえに、当該期の集落の景観や、より具体的な伝播過程についての研究には限界がある。しかしながら、今後の調査によって資料がより蓄積されれば、研究が急速に進展する可能性は高い。

【キーワード】 馬韓初期, 硬質無文土器, 打捺文土器, 集落編年

はじめに

近年、栄山江流域では中・上流域を中心に、多くの初期鉄器時代から原三国時代⁽¹⁾にかけての遺跡が確認されている。粘土帯土器段階の墳墓である木棺墓（土壙墓）は羅州，羅州，光州などの地域で、周溝墓系統は単独もしくは重複して咸平地域において確認されている。今後、初期鉄器時代の墳墓研究や、馬韓成立の社会的な背景に関する研究が進展するものと考えられる。

その一方で集落遺跡については、散在的ではあるが、紀元後2～3世紀を前後する住居資料が、光州，潭陽，長城など上流地域において徐々に増加しつつある。住居址の平面形は円形系が中心であるが、方形住居址の内部から硬質無文土器と打捺文土器（タタキ目文）が共伴する集落資料が確認されている。そのため、集落の上限年代と硬質無文土器の下限について年代についての関心が集中している。このような資料は、硬質無文土器と打捺文土器の単純期あるいは混用期という、栄山江流域の土器編年のみならず、原三国期の文化的な空白期の問題をある程度解消しえる点において、非常に重要な資料として評価できる。

栄山江流域の原三国期は、光州新昌洞遺跡、海南郡谷里貝塚〔목포대학교박물관 2016〕などが代表的な集落遺跡であり、郡谷里貝塚における編年体系が樹立〔최성락 1993〕された後には、多くの研究者がこれに従っている。ただし、郡谷里貝塚の編年体系については、近年においてもなお自然科学分析、研究論文、学術セミナーなどで賛否両論の状態にある。発掘調査が層序に沿って行われたことから、編年体系が説得力を有することは確かであるが、対象地域が海岸部に限定されている点、編年が特定器種に限られている点などは、資料的な限界とすることができる。このような状況を補完するためには、近年新たな資料が増加している新昌洞遺跡と郡谷里貝塚との比較分析が必要であろう。この2つの遺跡を見とおした土器分析を行うことができれば、栄山江流域の紀元前後から紀元後3世紀代までの土器の相対編年が、ある程度可能になると考えられる。

本稿では、近年事例が増加している、栄山江上流地域において硬質無文土器が共伴する馬韓初期の集落を分析することで、時間軸を設定し、その意味を検討することを目的としたい。そのため、まず原三国時代の土器編年に関する既存の研究成果を検討する中で、硬質無文土器から打捺文土器への変化の過程について、郡谷里貝塚を基準とした編年案を提示しようと思う。次に土器の相対編年の結果を基礎として、硬質無文土器が共伴する集落の景観を検討し、その意味を整理する。

このような分析は、近年提起されている栄山江流域における硬質無文土器から打捺文土器への転換期における編年研究上の問題点を、集落資料を通して補完しえるだけでなく、栄山江流域と日本列島の間で積み重ねられた交流関係の始発点を理解するうえでも必要な基礎研究となる。ここに本稿作成の意義をみいだしたい。

①……………これまでの研究動向および年代論

湖南地域のみならず、栄山江流域の原三国時代の土器についての研究は、海南郡谷里貝塚をはじめとし〔최성락 1993〕、様々な研究者が多様な方法によって推し進めている。その観点は大きく3

表 1 湖南地域における原三国時代の土器編年

	I 期	II 期	III 期
崔盛洛	BC2 世紀末・1 世紀初～AD1 世紀中葉 鉄器使用, 三角口縁粘土帯土器 硬質無文土器が主流	AD1 世紀後半～2 世紀中葉 硬質無文土器の持続 硬質擦文土器 打捺文土器の登場	2 世紀後半～3 世紀中葉 打捺文土器の一般化 灰青色硬質土器の出現 鉄器の増加
金承玉	BC2 世紀～AD1 世紀中頃 初期鉄器時代の遺物集中 断面三角形粘土帯土器, 黒陶, 高坏, 豆形土器	AD1 世紀中頃～3 世紀 硬質無文土器+軟質 打捺文土器 の共伴	3 世紀～4 世紀中頃 硬質無文土器の残存 軟質打捺文土器の増加 灰青色硬質土器の登場
朴淳發	BC2 世紀～BC1 世紀中頃 三角口縁粘土帯土器の単純期	BC1 世紀中頃～AD1 世紀中頃 硬質無文土器	1 世紀中頃～3 世紀 硬質無文土器, 縄文打捺文土器
李映澈	BC1 世紀～AD1 世紀 硬質無文土器の盛行期 光州新昌洞の中心年代, 海南郡谷里 II 期層	2 世紀 硬質無文土器の持続 軟質系 打捺文土器の登場 (直口甕++打捺, 灰色軟質打捺)	3 世紀 打捺文土器一色, 丸底の盛行 硬質無文土器がわずかに残存

つに区分できる。ひとつは、湖南地域全域についての相対編年の問題、2 つめは海南郡谷里貝塚の年代を湖南地域全域に拡大することによって生じる問題、そして3 つめは、2 つ目の問題と関連して柴山江上流の生活遺跡において硬質無文土器と打捺文土器が、それぞれ単独であるいは共伴して出土するといった問題である。

まず、ひとつめの観点、湖南地域における原三国時代土器の相対編年研究は、馬韓系住居址 [김승욱 2000], 土器 [박순발 2005], 土器と古墳 [이영철 2005] などの分析によって進展した。表 1 のように、硬質無文土器は紀元前後に登場し、紀元後 3 世紀代までその一部が残存するものとして把握された。しかし、近年、柴山江上流を中心として、生活遺跡において打捺文土器と共伴する資料が増加し、その下限年代について、さらなる検討が必要となっている。

打捺文土器の上限については、紀元後 2 世紀頃には出現したものと考えられているが、湖西や湖南地域西部については、紀元前 2 世紀後半 [김장식 2009] までさかのぼらせる必要があるという見解がある。その一方で、湖南・湖西東部圏において紀元後 2～3 世紀代に打捺文土器と硬質無文土器の共伴様相が認められるのに対し、西部圏ではほとんど認められず、いち早く硬質無文土器から打捺文土器への転換がなされたという状況を根拠として、紀元後 2 世紀代に打捺文土器が登場するという見方が妥当であるという見解も [이동희 2010] 提示されている。

次に 2 つ目の観点、郡谷里貝塚の年代についてである (表 2)。既往の研究 [최성락 1987, 안재호 1989, 이창희 2014, 김진영 2015, 진세영 2016] では、貝塚の上・下限時期と III・IV 期層における硬質無文土器から打捺文土器への転換問題に、論点が集中している。

貝塚の最下層である I 期層, 特に 12 層をみると, 2 次調査の 12 層 (磨研土器) や 3 次調査 12 層 (円形粘土帯, 豆形土器, 三角形石鏃) において, 遺物が混在している。すなわち, 最下層の磨研土器は松菊里文化の遺物であり, 南海岸においては遅い時期まで円形粘土帯文化と共存していた可能性が高い。周辺に散在している支石墓もまた, この時期の墓制として把握できる。I 期層 12 層の出

表2 海南郡谷里貝塚における編年の現状

	I	II	III	IV	V	
崔盛洛	BC4～3C 円形粘土帯土器, 三角形石鏃, 孔列 土器片	BC2C末～AD1C 中 三角形粘土帯土器, 貨泉	AD1C後半 硬質擦文土器, 勾玉	AD2C前葉 硬質無文(擦文)土 器> <u>灰色軟質土器</u>	AD2C後半～AD3C後葉 打捺文土器>硬質無文(擦文)土 器	
安在皓	1期	2a期		2b期	3期	
	<u>BC2C</u>	AD1C		<u>瓦質土器土器の不 在</u> , 貝塚の非連続性	AD3C～4C	
李昌熙	BC1C	AD1C 泥質焼成の硬質無 文土器の登場	AD1C前半～後半	2C <u>打捺文土器の登場</u>	AD2C中頃～3C 打捺文土器の一般化, 硬質土器	
김진영	1期 (郡谷I期層)	2期 (郡谷II期層11層)	3期 (郡谷II期層11～9層(2 次6～4層), III期層)	4期 (郡谷IV期層)	5期 (郡谷V期層)	
	BC3C末～2C中頃 松菊里文化, 円形 粘土帯土器, 豆形 土器	BC2C後半～1C中頃 弥生土器, 三角形粘 土帯土器の出現	BC1C後半～AD1C後半 貨泉, 楽浪打捺文土器, 鉄器の普遍化, 小型土器 や有孔土器, 三角形粘 土帯土器の型式変化- <u>轆轤 の使用</u> ガラス玉	AD2C前半～中頃 硬質擦文土器, <u>灰色 軟質土器の登場</u>	AD2C後半～3C 硬質擦文土器, 打捺文土器, 硬質 土器, 土製ガラス小玉鋳型	
전세원	I	II	III	IV	Va	Vb
	BC1C 円形粘土帯土器	BC1C前半～AD1 中頃 貨泉	AD1C後半 硬質無文土器 II期層と同様	AD2C前半 硬質無文土器が主流 硬質擦文土器, 打捺 文土器	AD2C中頃～3C 中頃 硬質無文土器の 持続, 硬質擦文 土器が中心	AD3C中頃～4C 前半 硬質擦文土器が 持続, 打捺文土 器が中心
韓玉珉	<u>BC2C 円形粘土帯土器</u>	BC1C前半～AD1C 三角形粘土帯土器, <u>硬質擦文(部分的に縄目タ タキ)</u> , 貨泉		AD2C 硬質無文土器が主 流, <u>軟質打捺文土器</u> が出土	AD3C中葉～5C前半 打捺文土器が主流, 硬質無文土器 が残存, 外来遺物	
筆者	BC2C 松菊里型文化の残 存, 円形粘土帯土 器(豆形土器は形 式的に後行)	BC1C? 三角形粘土帯土器, 硬質擦文土器	AD1C 貨泉, 硬質無文土器 (長卵形土器)	AD2C 硬質無文土器が主 流, 軟質打捺文土器 が出土	AD3C～5C前半 打捺文土器, 住居址, 土器窯, 縄 席文土器	

土品は, 장지현分類 [장지현 2015] のII段階B型住居址の出土品と同一であり, その立地も郡谷里のような丘陵頂上部や斜面である。氏は, II段階の時期を紀元前3世紀前半～紀元前2世紀中頃と見ているが, 郡谷里では組合式牛角形把手が確認されず, 三角形粘土帯土器と共伴する豆形土器の短脚片や, 中空の長脚片が出土しており, 年代はより下る可能性が高い。したがって, 郡谷里貝塚の上限は, 紀元前2世紀代とみるのが妥当であり, その下限については, 貝塚V期層に当たる2層の出土遺物を打捺文土器が一般化する段階の所産と把握して, 紀元後3世紀とみることができる。遺跡自体の消滅時期は住居址 [정일 2016], 土器窯 [이지영 2016], 加耶系縄文打捺土器の年代など

の年代からみて、4世紀後半から5世紀前半代頃と考えられる。

郡谷里Ⅲ・Ⅳ期層の問題については、多くの研究者が硬質無文土器から打捺文土器への変化過程を認定している。しかし、전세원 2016 では、Ⅳ期層の年代比定において硬質擦文土器を基準とすることは適切ではないとしている。しかしながら、打捺文土器がⅣ期層においても出土しているという報告者の見解と、C14年代のデータから他の研究者と同様に2世紀前半と想定していることは、やや矛盾をみせている。

Ⅲ期層の年代については、出土した貨泉の年代を適応させることができ、またⅢ期層の中での最下層である8層から出土した胴部が長大な長卵形硬質無文土器は、光州伏龍洞2号土壙墓出土品[동북아지석묘연구소 2016・2018]と形態が同一である(図2)。伏龍洞2号墓は紀元前1世紀よりもやや後行する可能性が高く[정인성 2017]、三角形粘土帯土器、硬質無文土器、鉄鎌などの遺物構成から、紀元後1世紀頃と判断される。

Ⅱ期層は、貝塚全体の層序からみれば、円形または三角形粘土帯土器が共伴する時期もしくは、三角形粘土帯土器の単純期として設定されなければならない。しかし実際は、三角形粘土帯土器と硬質無文(擦文)土器が共伴しており、Ⅰ期層との間に若干の空白期が存在する可能性が高い。今後の資料確保を期待しつつ、三角形粘土帯土器の年代を考慮し、Ⅰ期よりは若干遅い紀元前1世紀代のある時点としておきたい。

以上の郡谷里貝塚に対する筆者が想定する年代を提示すると、表2、図1のようになる。

一方で、海南郡谷里貝塚の発掘30周年を記念した学術大会において提示された、硬質擦文土器の年代論に対する新たな解釈[한옥민 2016]が、注目される。この見解では、硬質擦文土器は、細砂粒を含む胎土で器壁の厚みが均一な点、回転力を利用したナデ調整、当て具の使用などの要素が、硬質無文土器に確認されるものではないことが指摘されている。そして、瓦質土器にタタキが採用されているように、紀元前のある時点で打捺文土器の製作技術の情報を認知する過程において登場した土器であると解釈された。

そして、Ⅱ期層で出土している深鉢形土器に縄目タタキが観察できること、霊岩郡洞13号周溝墓出土の硬質無文小壺にも格子タタキの痕跡が認められることを根拠として、硬質擦文土器の年代を紀元前1世紀代にさかのぼらせる必要があると、主張している。タタキ(打捺)による製作技法が、紀元前にすでに試みられていた可能性を提示した点が注目される。これと関連して、光州新昌洞遺跡[대한문화재연구원 2016]において、中国の五銖銭が出土した層に、粘土帯土器、硬質無文土器、打捺文土器が共伴した生活遺構が確認されており、タタキ技法の導入が特定地域においては、より遡る可能性もあると考えられる。

最後に、3つめの観点、柴山江中上流域の集落から出土する硬質無文土器、打捺文土器の編年についてである。柴山江流域の上流一帯の沖積地や低地帯では、円形もしくは隅丸方形の住居址内部から硬質無文土器と打捺文土器が共伴して出土する事例が相次いで確認されており、土器編年のみならず住居址の上限年代が問題として議論されている。1990年前後には、海南郡谷里、光州五龍洞、日谷洞など、河岸に近い沖積台地上に少数の遺跡が確認されたにすぎず、特に注目を集めることはなかった。しかし、近年になって、沖積台地のみならず、長城地域のような内陸の丘陵地でも硬質無文土器が出土する住居址が頻繁に確認されるようになってきている。

期層	郡谷里遺跡出土遺物	分期
I期層	14層	1期
	13層	
	12層 紀元前2C	
II期層	?	2期
	11層 2次調査(7層)	
	2次調査(6層)	
	2次調査(5層)	3期
	紀元前1C? 2次調査(4層)	
	10層	
	9層 2次調査(2層)	
III期層	8層 紀元後1C	
IV期層	7層	4期
	6層	
	5層 紀元後2C	
V期層	4層	5期
	3層	
	2層 紀元後3C-5C前半	

図1 海南郡谷里貝塚の編年

これと関連して、潭陽台木里遺跡についての分析 [강귀형 2013] において、柴山江上流域の住居址の年代を、紀元後2世紀代まで遡らせる意見が提示された(図3)。すなわち、台木里遺跡の円形・隅丸方形の住居址、硬質無文土器を主体とした出土土器、そして打捺文土器が出現する段階をI期と設定し、その住居址の年代を紀元後2世紀に比定している。その一方で、円形系住居址と硬質無文土器単純期、そして硬質無文土器と打捺文土器の共伴期をそれぞれ100年程度下らせることで、柴山江上流の集落の上限年代を紀元後3世紀中葉頃として、その年代観を周辺地域の一部にも拡大して適用させようという研究もある [전세원 2016]。ただし、後者の見解は、みずからが提示した

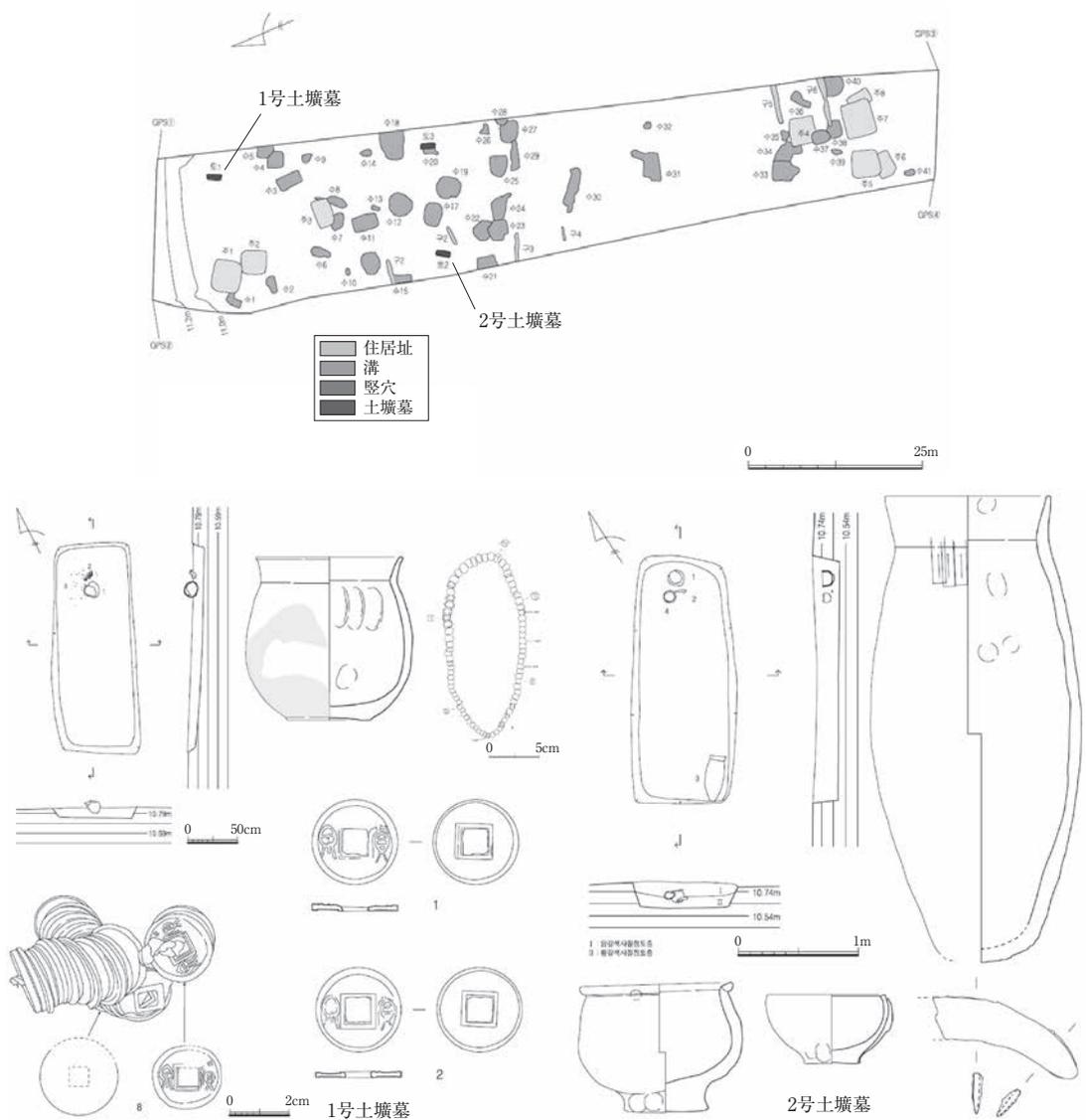


図2 光州伏龍洞遺跡の遺構分布図と土壙墓

郡谷里貝塚における打捺文土器の年代観とは矛盾している。この点は、論文の末尾 [전세원 2016 : p.113] において自ら指摘しているように、湖南地方や全南地域の物質文化を中心部と周辺部の地域的差異を考慮していない点に問題があり、また全南地域の住居址や土器編年を 100 年以上下降修正したことによって、原三国期における空白期を 200 年以上に広げてしまう結果を招いている。

この点に関しては、具体的な集落資料を概観しつつ、次の章において考えてみたいと思う。

②……………馬韓初現期の集落資料

この章では、栄山江上流において粘土帯土器や硬質無文土器が単独で出土した集落、もしくはそれらと打捺文土器が共伴して出土した集落について、最新の資料を含めてその特徴を概観してみた

い。集落の立地や構造、個別遺構を中心に検討し、調査報告書が未刊の場合は、概略報告書を参考とする。

1. 潭陽台木里遺跡 [강귀형 2013 図3]

遺跡は榮山江上流の高大な沖積地に立地し、1,000余基に達する住居址が確認された。この中で、硬質無文土器と関連する円形系住居址は11基であり、一部後行する隅丸方形の住居址においても確認された。これらの円形住居址出土の遺物は硬質無文土器の長卵形土器、鉢形土器、甕形土器などで、一部甌も共伴している。青銅器時代の松菊里型住居址段階の後、新たな集落が登場し、かつ出土土器からみて硬質無文土器単純期であることから、その下限については、紀元後2世紀後半代と推定することができる。

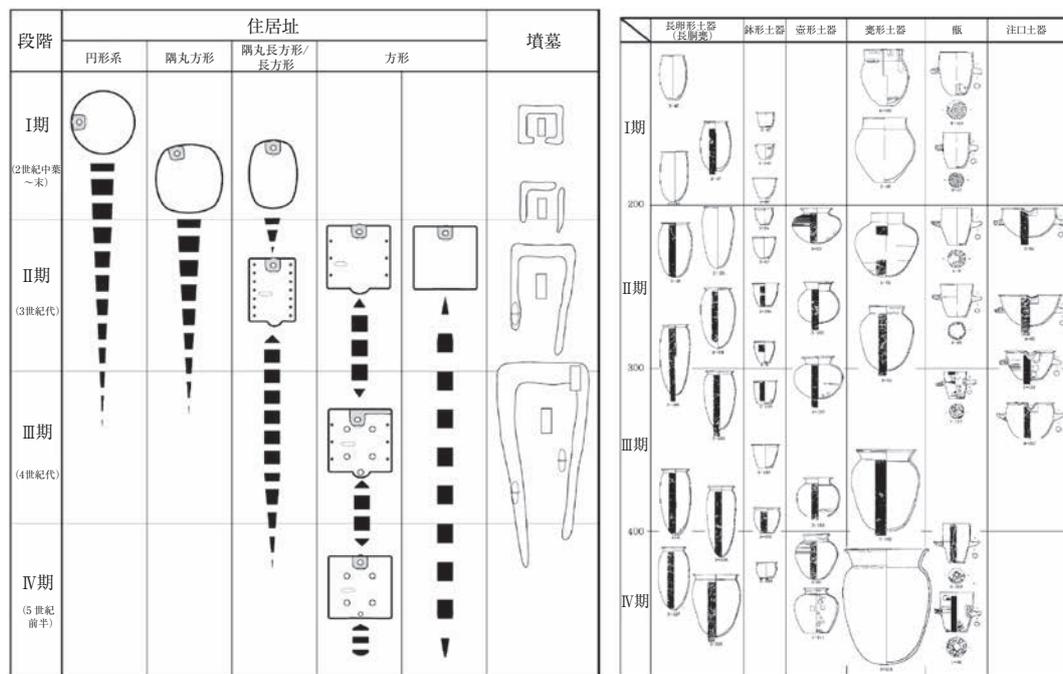


図3 潭陽台木里遺跡における住居址・墳墓

2. 長城長山里遺跡 [호남문화재연구원 2013・2015 図4]

遺跡は低丘陵地と黄龍江の間に広がる沖積地に位置している。1次調査では、黄龍江から西へ分岐する鷲岩川の南側沖積地において、三国時代の遺構を主体とした遺跡が確認された。硬質無文土器は住居址や溝から出土している。住居址をみると、硬質無文土器が出土する頻度が高いものは平面方形で無施設型であり、打捺土器が出土するものも多くは、カマド(부뚜막)構造が確認できる。溝状遺構は、住居址群の南側に位置し、無文土器、硬質無文土器、打捺土器が共伴している。その中で底部の高台片や鉢形土器などは、硬質無文土器の器形に近いが、焼成は軟質焼成である。

2次調査では、黄龍江の河岸に近い沖積地において5基の住居址から硬質無文土器が出土した。

これらの住居址は方形系で、一辺 3m 規模で無施設のものとかまどをそなえたものの両者が共存している。出土土器は 1 基の住居址当たり 3 点程度で、打捺文土器の数量が比較的多い。年代については、19 号住居址では、土器については無文土器と硬質無文土器のみ確認されたが、その他の遺物は打捺文土器と遅くまで共伴するものである。おおむね 3 世紀前半代と判断され、その下限は 4 世紀前半頃と想定される。

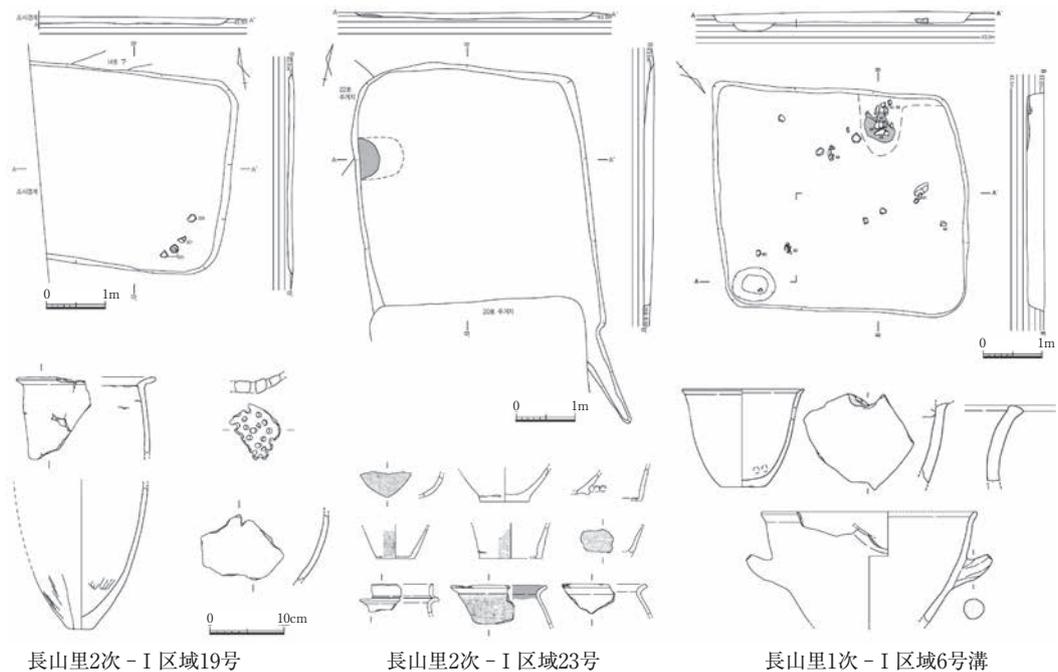


図 4 長城長山里遺跡の遺構と出土遺物

3. 長城舟山里遺跡 [전남문화재연구원 2016 図 5]

長城地域の尙武平和公園造成事業において確認された遺跡は、海拔해발 70m 程の丘陵頂上部から斜面にかけて位置している。遺構は住居址 129 基、竪穴 50 基、溝状遺構 21 基が調査された。その中で、硬質無文土器が出土した遺構は、住居址 7 基、竪穴 4 基、溝 1 基、総 12 基である。住居址は平面方形で四本柱の柱穴、カマドなどが確認できる。共伴遺物は打捺文土器、カマドの支脚に用いられた鉢・長卵形土器などで、時期的には後行する可能性がある。

注目できる遺構は竪穴である。竪穴は平面隅丸方形や楕円形を呈するものが大部分であり、14 号は隅丸方形で一辺 7.2m 程度と規模が大きく、(長)楕円形のは、長さ 2.4~3m と円形系住居址の規模と類似する。遺構の重複によって内部構造の把握が難しいが、硬質無文土器段階には隅丸方形と(楕)円形系のものが多数を占めており、より重複する遺構の中で先行する住居址(竪穴?)と判断してみることもできる。

その年代について報告者は出土遺物から紀元後 2 世紀~4 世紀前半、中心年代を 3 世紀代と推定しているが、一方で紀元後 3, 4 世紀代とみて、中心年代を 4 世紀前後と把握する見解もある [9]

동희 2016]。この2つの見解は硬質無文土器に対する認識の違いを反映しており、前者は、榮山江流域の硬質無文土器の先行研究において指摘されているように、軟質土器が多数を占め灰青色硬質土器が少量である点を根拠としているようである。

しかし、カマドが備わる方形住居、それが四柱式であること、そして軟質打捺文土器が共伴することからみて、硬質無文土器が出土した住居址の多くは、打捺文土器の年代を考慮して3世紀中葉まで時期を下らせて考えることができそうである。ただし、上述の先行する竪穴の中で住居址と推定しえるものについては、2世紀後半～3世紀初めまで遡らせることができるのではないかと考えられる。正式報告書の刊行後に、より精密な検討が必要である。

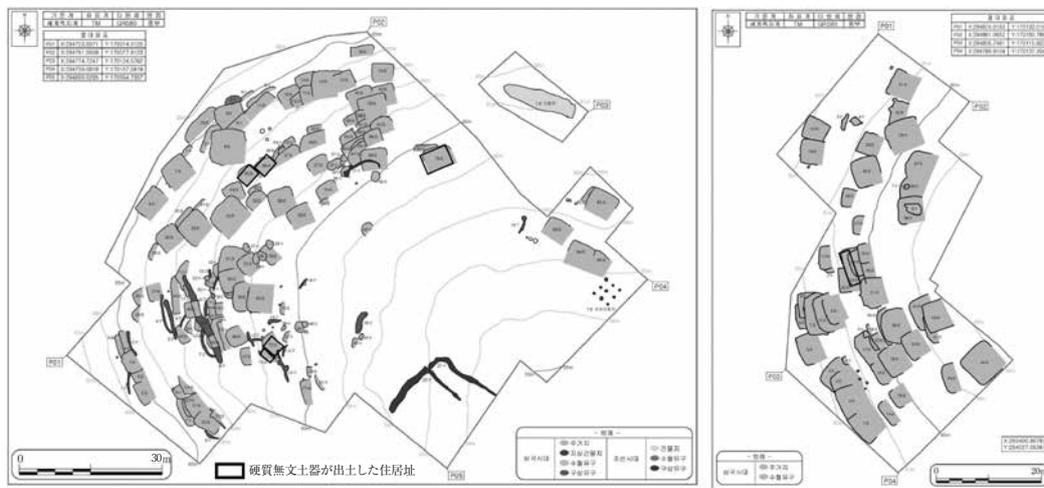


図5 長城舟山里遺跡の遺構分布図

4. 光州龍谷A遺跡 [호남문화재연구원 2009 図6]

遺跡は平洞川西方の海拔35m程の緩慢な丘陵斜面の末端に位置しており、その東側には「サンドゥル(산들)」という高大な沖積平野が形成されている。住居址16基は円形系10基、方形6基

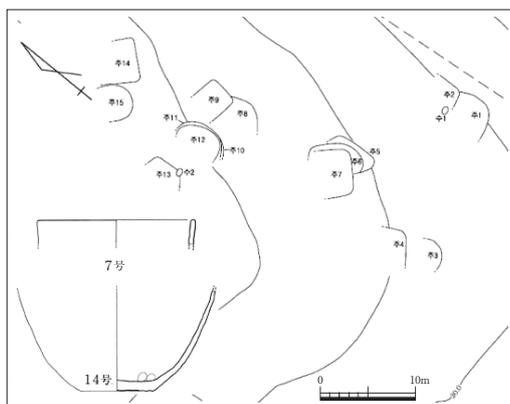


図6 光州龍谷A遺跡の遺構分布図と出土遺物

であり、その規模は4～6m大と相互に類似する。遺構の重複関係をみると、方形が円形に後行する。後世の削平によって内部構造の把握が難しいが、文化層が遺存していると想定される周辺には、同様の遺構が多数存在すると考えられている。遺物は方形系の住居址から軟質土器や硬質無文土器が出土しているが、円形系の住居私からは出土しなかった。出土遺物や、竪穴から出土した偏口短頸壺の年代から、方形系住居址の中心年代は3世紀代と考えられるが、先行する円形埴形住居址は、より以前の時期から存在していた可能性がある。

5. 光州五龍洞遺跡 [목포대학교박물관 1995 図 7]

光州五龍洞遺跡は丘陵の南斜面に位置しており、住居址や溝などが確認された。住居址の中で円形系は1基にすぎず、ここからは無文土器片が確認されている。粘土帯土器段階の遺構としては、溝状遺構3基が調査された。溝は南側斜面の等高線に沿って、一定の間隔を置いて分布している。粘土帯土器は三角形粘土帯土器が大部分であり、攪乱層の遺物を除外すれば、67点がほぼ同時に廃棄された様相を示している。出土遺物は、無文土器、三角形粘土帯土器、組合式・牛角形把手、豆形土器の多様な台脚部、そして硬質無文土器が少量確認された。報告者は祭祀施設と把握して、三角形粘土帯土器段階として紀元前2世紀前半～紀元前1世紀と考えている。断面三角形の単口縁部は確認されず、硬質無文(擦文)土器も少量ではあるが確認できるので、紀元後までは年代が下ることはないと判断できる。

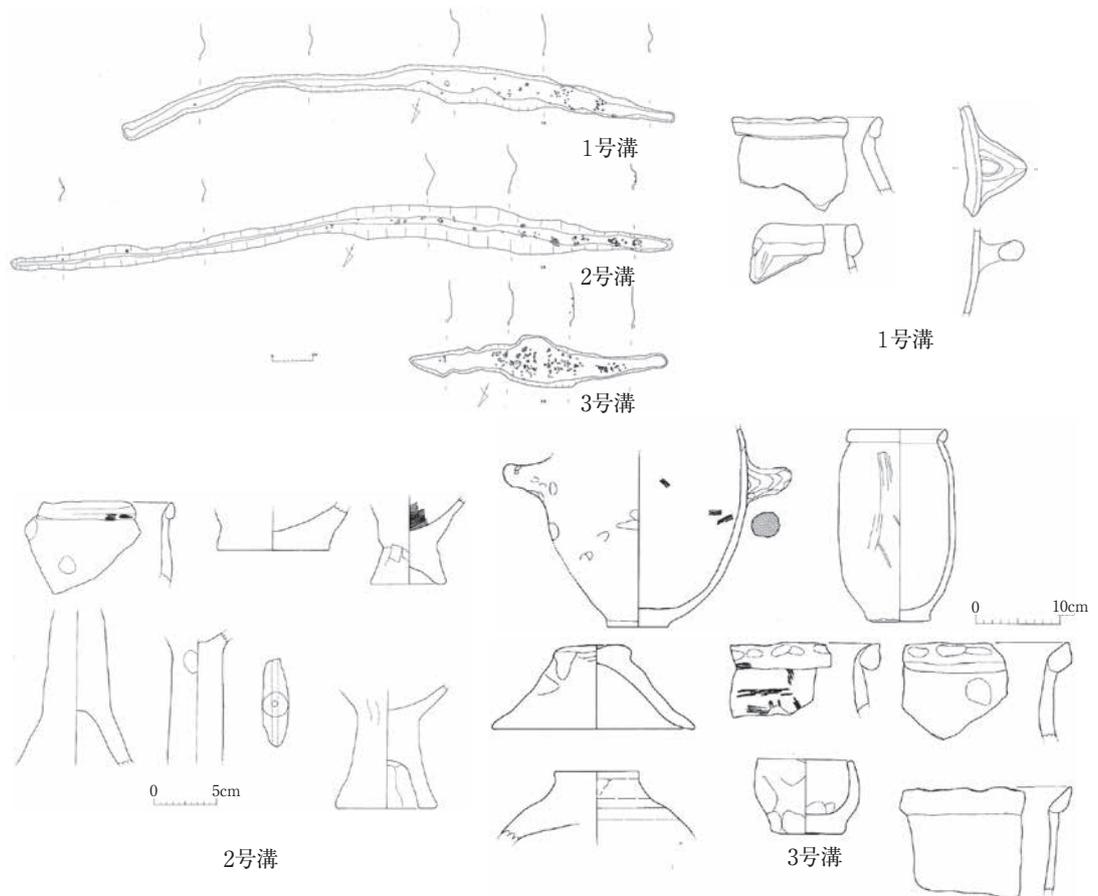


図 7 光州五龍洞遺跡の溝状遺構と出土遺物

6. 光州明花洞遺跡 [국립광주박물관 2012 図8]

光州明花洞遺跡は、低丘陵末端の斜面に位置している。住居址は前方後円形墳の調査過程において、後円部造営に先行する遺構として確認された。住居址2基は隅丸方形を呈し、内部にカマド、貯蔵穴が確認された。1号住居址の遺物は低い温度で焼成された硬質無文土器に近く、2号住居址ではそれに縄目タタキの打捺土器が共伴する。住居址の平面形やカマド構造は定型的なものではなく、土器の焼成技術も劣っている。年代は、おおむね紀元後3世紀代と考えられる。

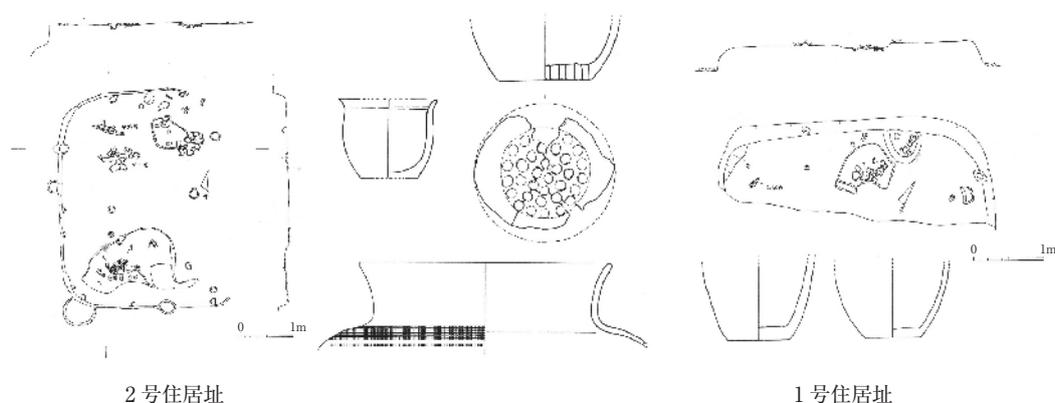


図8 光州明花洞遺跡

7. 光州道山洞서동遺跡 [대한문화재연구원 2017 図9]

遺跡は黄龍江の影響によって形成された沖積地に形成され、微高地では三国時代の住居址、竪穴、溝が確認され、微低地では耕作遺構が調査された。河川をはさんだ向かい側に位置する平洞遺跡と地形の上で同様な立地条件である。生活遺構を中央としてその両側に耕作遺構が分布するような景観である。

住居址は、明らかに後行する四柱式住居址をのぞくと、いずれも中小型に該当する。また、13号の無施設型の円形系住居址以外は、方形系である。その内部施設は主に北側にカマド、カマドの反対側に出入口施設、そして一部に四本柱の柱穴などである。出土遺物は軟質土器が多数を占め、硬質無文土器の破片が5基の遺構から61点出土している。硬質無文土器は、遺構の時期や住居址の構造とは関係なく、幅広く出土している。

60基以上の遺構の中で、13号住居址が1基のみ円形系の住居址であり、硬質無文土器のみ出土している。あるいは、それ以前の文化層も存在したが、後行する遺構との重複によって、この時期の遺構が失われてしまった可能性もあろう。

遺跡の年代については、硬質土器がほとんど出土せず、硬質無文土器と軟質土器が共伴していることからみて、4世紀を下限と把握することができよう。このことは、榮山江流域の硬質無文土器の下限を4世紀まで下らせて考えることができる集落資料という点において意義がある。ただし、円形系住居址が確認されていることや、沖積地に立地する点など、上述のように紀元後2、3世紀

代の硬質無文土器を主体とする文化層が存在した可能性が高い。

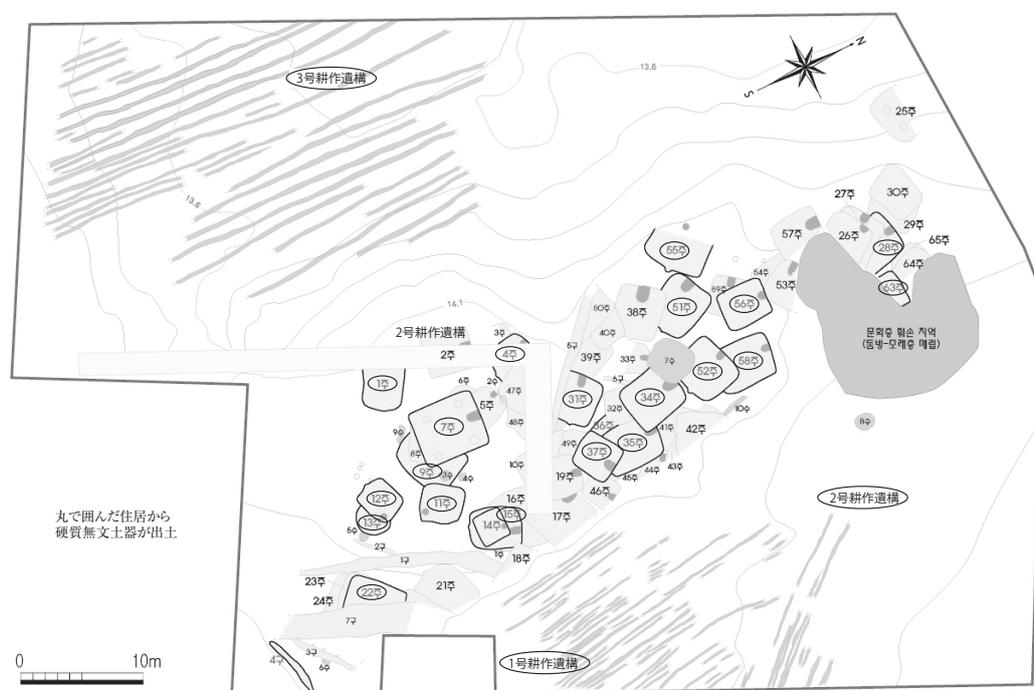


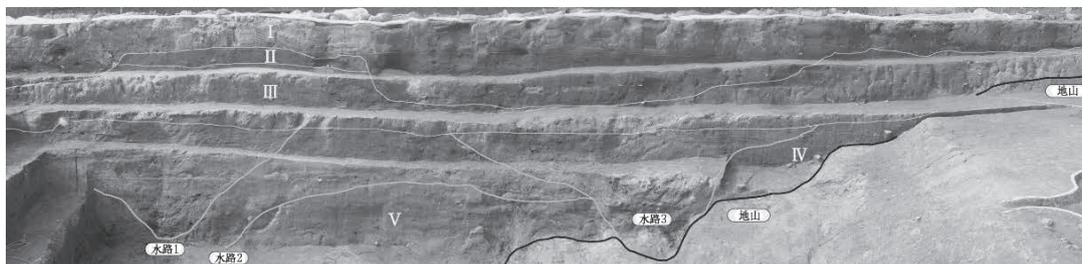
図9 光州道山洞서동遺跡の遺構分布図

8. 光州新昌洞514-1番地遺跡 [대한문화재연구원 2016 図10]

遺跡はよく知られている新昌洞遺跡から南東へ続く地点に位置しており、南斜面の末端部に該当する。谷部をはさんで反対側では、初期鉄器時代から羅末麗初に至る耕作遺構が確認されている。基準層序をみると、最下層（V）は新昌洞低湿地遺跡と関連する旧河道の形成層であり、三角形粘土帯土器と硬質無文土器が出土している。IV層は丘陵の谷間部の埋没に伴う土壤環境の変化によって生じた層位であり、五銖銭、硬質無文土器、打捺文土器が混在している。一部の遺構からは、退化した三角形口縁の粘土帯土器が出土している。III層から表土までは、高麗時代や朝鮮時代の遺物と、打捺文土器などが混在している層位である。

この中で、本稿と関連するのはIV層である。IV層では住居址、竪穴、溝状遺構が確認された。住居址は3基の方形系住居址が確認され、明らかに後行する3号をのぞいて、三角形粘土帯土器、硬質無文土器、打捺文土器が出土した。竪穴は26基程度が確認されたが、今後の検討によって住居址や廃棄場として遺構の性格が認定されえるものも含んでいる。その平面は円形系であり、出土遺物は三角形粘土帯土器、硬質無文土器、打捺文土器がそれぞれ単独で出土する場合と、共伴して出土する場合がある。10号は木炭や焼土を含み、かつ遺物が層をなして出土したことから、廃棄場と推定される。また、26号の場合は、遺構断面が傾斜を持ち、遺物はその低い側から集中して出土することから、土器窯の可能性もある。

この窯や廃棄場という推定が妥当であれば、それを運営していた当時の遺物が粘土帯土器や硬質



遺跡の全体的な層序関係



2号住居址



8号堅穴と土層断面



五銖銭

図10 光州新昌洞514-1番地遺跡(2016年調査)の層序と遺構, 出土遺物

無文土器と報告されていることから、榮山江流域における最初期の土器窯として評価できる。窯の年代の手がかりとなる資料としては、IV層出土の五銖銭であり、この貨銭が廃棄された後に窯と推定される26号堅穴が造営されている。

五銖銭は、周知のように前漢の武帝が発行(紀元前118年)した後に、新の段階に暫時廃止される。その後、後漢が復活させ、紀元後40年にふたたび発行されるようになる。新昌洞出土品は「銖」の傍の上部が角張っており、前漢代に発行された貨幣と考えられる[권옥택 2013]。したがって、この五銖銭の製作時期と廃棄時期に時期差がそれほどないと仮定すれば、IV層の年代は遅くとも紀元前1世紀代とみることができそうである[이영철 2017]。このことは、他の住居址、堅穴などの遺構の年代を設定する際の基準とすることができ、硬質無文土器と共伴する打捺文土器の出現時期を、もう少し遡らせて考える根拠となり得る。このような状況の背景として、新昌洞集団が外来文物を受容する交易の中心地であったことを想定できよう。

9. 光州平洞遺跡 [호남문화재연구원2012 図11・12]

遺跡は黄龍江と平洞川の間に広がる沖積地に位置し、青銅器時代から朝鮮時代にかけての多様な遺構と遺物が確認された。硬質無文土器は、青銅器時代や三国時代の住居址や堅穴から出土している。青銅器時代の遺構としては、松菊里型住居址や無施設型の円形住居址が確認された。住居址の内部では、楕円形掘形の内外の柱穴施設、無施設、焼土などが確認される。

施設が全く確認できない無施設型は、光州龍谷 A、潭陽台木里などで確認される。出土遺物は硬質無文土器が主体を占め、無文土器、軟質土器の破片も少量確認される。また、石器類も出土している。平面方形の住居址であっても、円形に近い平面形を呈しており、その出土遺物は硬質無文土器が主体で、一部に粘土帯土器が共伴している。このように、青銅器時代の住居址は硬質無文土器を標識とみることができ、紀元前後の時期まで松菊里型住居址が下るものと判断される。また、住居址の平面形が定型化しカマド施設も備わる三国時代のもを除くと、上述のように方形住居においても硬質無文土器が出土している。堅穴は多様な形態が確認され、粘土帯土器、硬質無文土器、そして軟・硬質の打捺文土器などが出土した。この中で、硬質無文土器が60%以上を占めており、硬質無文土器段階のものが中心と考えられる。その器種をみると、量的に多いものから順に、高坏、甌、蓋、鉢、そして把手付土器となる。その一方で、粘土帯土器も200余点出土しており、粘土帯土器段階から硬質無文土器段階の過渡期の資料も含まれている可能性が高い。

粘土帯土器は少量の円形粘土帯土器が三角形粘土帯土器と共伴する様相であり、堅穴遺構の上限は、三角形粘土帯土器段階とみることができ、おおむね紀元前2世紀後半に該当しよう。また下限については、硬質無文土器の単純期から軟質打捺文土器が共伴する段階までである。その絶対年代については紀元後3世紀まで下る可能性もあるが、すくなくとも硬質無文土器の単純期については、紀元後1、2世紀が中心と判断される。

③……………集落の編年と意義

これまでみてきたように、栄山江上流域において硬質無文土器は三角形粘土帯土器や打捺文土器と共伴したり、あるいは単独で出土する。現状では、住居、堅穴、溝状遺構などからの出土が確認され、遺跡数は9箇所程度である。これらの集落の編年を検討し、その特徴と意味を見出してみたい。

硬質無文土器の上限は、円形粘土帯土器と共伴する事例が平洞遺跡や新昌洞遺跡などで確認できるが、おそらくは三角形粘土帯土器と共伴する時期と考えられる。光州地域において、三角形粘土帯土器が出土する時期は紀元前2世紀後半～紀元後2世紀前半頃と設定できることを考慮すれば、遺構から安定的に硬質無文土器が出土する時期は、紀元前1世紀～紀元前後頃と考えられる。その出現時期は、郡谷里よりも若干早いかもしれないが同時期であり、栄山江上流域の硬質無文土器文化が、若干早く開始された可能性もあり、時期的な差異を考慮する必要があるだろう。

その下限は、硬質無文土器の単純期を経て打捺文土器と共伴する時期となる。打捺文土器の出現時期の問題はとりあえず置くとして、このような共伴事例は、三国時代と設定される住居遺跡において確認される。例えば、長城地域の長山里集落遺跡では、紀元後4世紀前半代の日常用土器と共

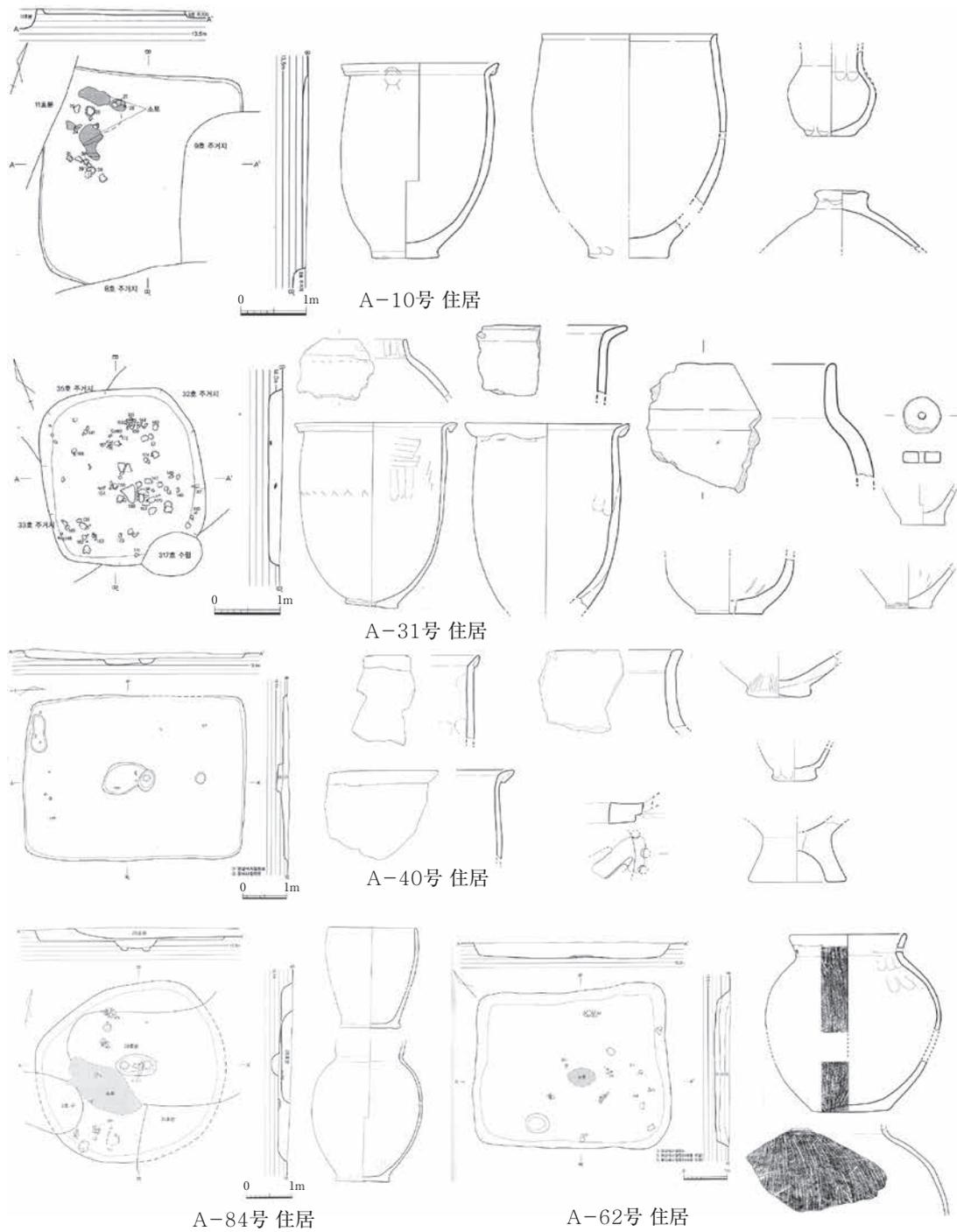


图 11 光州平洞遺跡の住居址と出土遺物

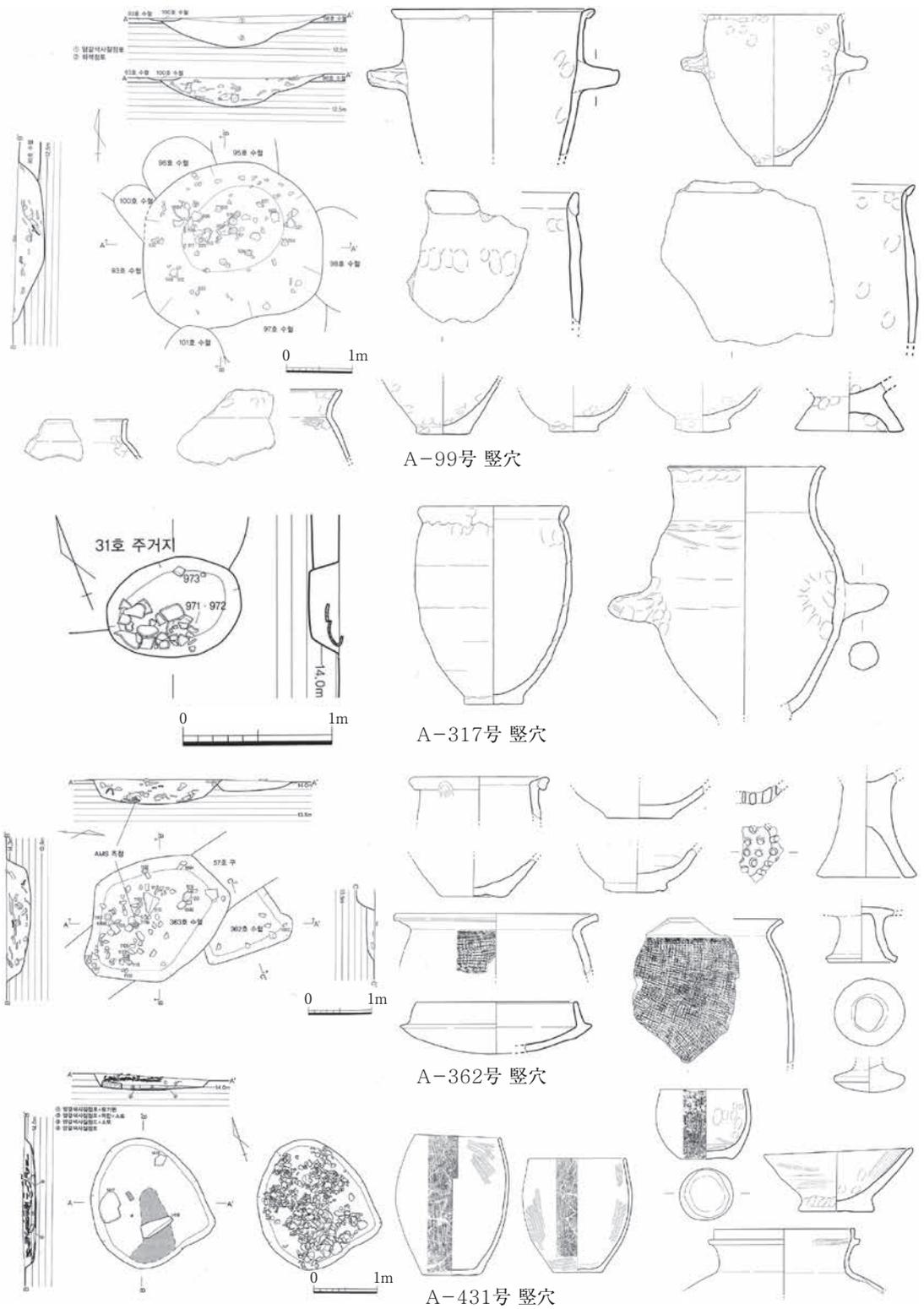


图 12 光州平洞遺跡の竖穴と出土遺物

伴している。また、光州地域では道山洞遺跡において、最も後行する四柱式住居址において、硬質無文土器と打捺文土器が共伴する。遺跡の廃棄時点である紀元後4世紀代の相当に遅い時期まで、硬質無文土器が残存していたことがうかがえる。

以上のような上限、下限の時期を考慮すると、硬質無文土器は3段階に区分することができる(図13)。

1段階は、三角形粘土帯土器と共伴する段階で、紀元前1世紀～紀元前後頃と推定され、「擦文土器」も少数出土している。該当する遺跡は、光州新昌洞、平洞、五龍洞遺跡である。新昌洞遺跡は2016年の調査によって、三角形粘土帯土器と打捺文土器が共伴する竪穴、住居址などが確認され、相対編年上の重要な資料となっている。絶対年代を示す五銖銭が出土した同じ層位から、打捺文土器が出土しており、その上限年代を追跡する手がかりとなり得る。今後、新昌洞遺跡全般の出土土器に対する検討が行われれば、郡谷里貝塚における層位的な編年を補完することが可能となろう。平洞遺跡では、松菊里型住居址、方形住居址、竪穴、溝状遺構が確認された。硬質無文土器の出土によって、松菊里型住居址の下限が紀元前後まで下る可能性が高いことが想定される。

2段階は、硬質無文土器の単純期であり、紀元前後～紀元後2世紀中頃の時期である。遺跡としては、光州新昌洞と平洞遺跡が該当する。この2つの遺跡は、硬質無文土器段段階の集落であり、広い沖積地から沖積地末端の斜面部に広がる。平洞遺跡は住居址、竪穴、溝などを備えた居住空間の集落遺跡である。住居址は平面円形と方形のものが確認でき、松菊里型住居の特徴である楕円形掘形が失われた形態と判断される。ゆえに、内部に特段の施設が設けられておらず、遺物のみが出土する。すなわち、カマド施設が導入される以前の段階とみることができる。

住居址の規模は、3、4mほどの中・小型であり、円形よりも方形のものがより大きく、平面方形のものは徐々に隅丸方形へ変化していく。他の遺構としては竪穴や溝状遺構がある。竪穴の中には、住居址と分類できるものも多いと考えられる。平洞遺跡は粘土帯土器段階(本稿の1段階)から営

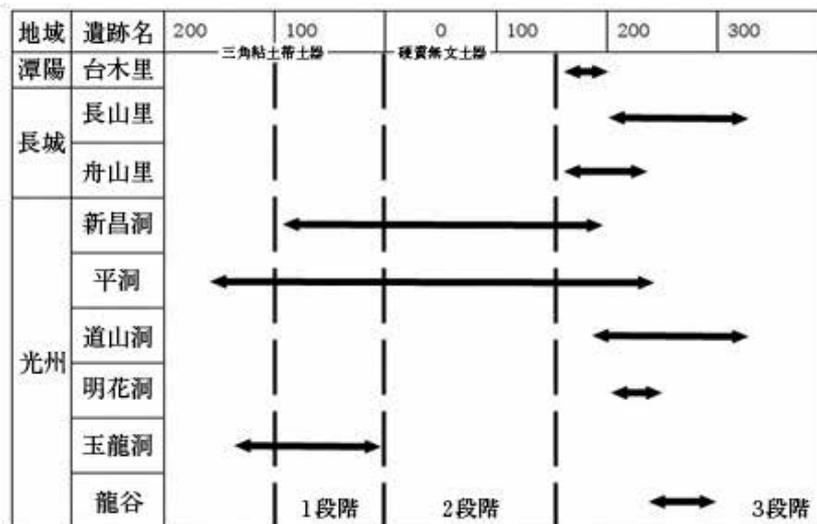


図13 柴山江上流における硬質無文土器の段階設定

まれ、硬質無文土器段階に集落が拡大され、溝による区画がなされるようになっており、小集落を単位としていた可能性もある。

新昌洞遺跡は、これまでのところ少数の住居址に竪穴、窯（廃棄場?）、耕作遺構、溝状遺構が確認されている。上述のように、竪穴は土器生産による廃棄場の可能性が高く、その周辺に窯と推定される遺構も分布している。その内部では焼土や灰による層序が確認され、土器も出土している。傾斜面に位置していることからみても、栄山江流域において最初期の登窯である可能性も指摘できる。出土土器は、硬質無文土器が主体を占め、単口縁の三角形粘土帯土器も少量確認されている。

生活遺構南側の斜面の谷部には、粘土帯土器と硬質無文土器が出土する溝状遺構があり、平坦面には耕作遺構が広がる。新昌洞集落の集団は、平洞集落（居住空間）の集団とは異なり、土器製作や農耕のような生産活動に主に従事していたと判断される。また、外来遺物である弥生土器や中国貨幣が出土していることからもうかがえるように、生産活動によって獲得した資源を基礎として、対外交易にも従事していたようである。新昌洞から出土した弥生土器は、九州地域との交流活動を示す直接的な証拠であり〔武末 2013〕、この時期には、中国東北部から韓半島西北部―韓半島南部―北部九州地域を連結する網の目状の地域ネットワークが形成されていた可能性についても、具体的に提示されている〔高田 2017〕。

最後の3段階は、硬質無文土器が打捺文土器と共伴する段階であり、紀元後2世紀中頃～4世紀代と推定される。時期幅が広く、三国時代の住居址において少量出土する場合が大部分である。住居址は平面形が隅丸方形でカマドを備え、地域別もしくは時期別の差異が顕著である。ただ、同一遺跡の中でみると、内部にカマドなどの施設を備えない住居が先行する。光州龍谷A遺跡、潭陽台木里遺跡などでは、円形住居址が一定期間維持された後に方形へと変化する。その一方で、平洞遺跡の向かい側の沖積地に位置する道山洞遺跡では、円形系住居址が1基のみ存在し、その次の段階には方形住居址で出入口施設やカマドを備えた典型的な三国時代の住居址へと変化している。

ただし上述のように、道山洞遺跡では遺構の重複関係からみると、後代の遺構によって先行する円形系の住居址がかなり失われている可能性もある。また、遺跡の立地をみると、沖積地の平坦地以外に、丘陵状にも遺跡が広がっているので、沖積地から丘陵地への集落の移動もまた考慮する必要があるだろう。

新昌洞遺跡と平洞遺跡は、2段階につづいて存続するが、新昌洞遺跡の場合、早い時期に三国時代の集落が丘陵斜面に営まれるようになり、硬質無文土器（文化）は徐々に衰退していったと判断される。

以上、栄山江上流域の硬質無文土器を1～3段階に区分し、関連する集落遺跡の特徴について述べてきた。無文土器から硬質無文土器への変化は、自生的なものと考えられる一方で、海南郡谷里貝塚のように、外部との交易を通じて他地域よりも早く先進技術を受容する動きも要因となっていたと考えられる。後者を重視しつつ、光州新昌洞と平洞の地勢をみると、平洞は平洞川と黄龍江の間の沖積地に位置しており、大規模な集落へと拡大する。松菊里型文化が長期間維持され、主に居住空間として利用されていた。

平洞遺跡の入口部に該当する伏龍洞遺跡でも、竪穴、住居址などが確認されており、平洞遺跡における硬質無文土器を主体とする時期と、ある程度一致をみせる。この伏龍洞遺跡の2号土壙墓か

ら、中国貨幣（貨泉）が銭差しの状態で出土しており、中国とのやりとりをした貿易商人が居住していた空間であった可能性もあろう（図2）。

また、新昌洞遺跡では中国や日本列島との交易物品が出土しており、おそらく土器生産や農耕などによる剰余生産物を基盤としつつ、交易が活発に行われた「港市」[이영철 2017]が存在した可能性もある。

このように、人びとが集住する「港市」や居住空間は、硬質無文土器段階における栄山江上流の中心集落と考えることができる。長城、潭陽などの周辺地域は栄山江や黄龍江のような水系を通じて、容易に情報を取得できる環境にあり、それを契機として硬質無文土器が黄龍江上流や潭陽台木里の沖積地などに伝播したと推定してみるることができる。

栄山江上流の硬質無文土器資料がより蓄積されれば、無文土器からの自生的な変化のみならず、外部からの物質文化の移入—成長—周辺部への伝播など、多様な研究を進めることができると考える。それとともに、光州新昌洞遺跡において、打捺文土器の登場と、早くに進展した硬質無文土器窯の造営が、相互に関連している可能性についても、今後綿密な検討が必要であろう。

おわりに

本稿では、栄山江上流の硬質無文土器段階における集落の編年と意義について検討した。まず、既存の研究成果を基礎としながら、本稿の主題と深くかかわる海南郡谷里貝塚における筆者なりの編年案を提示してみた。また、近年議論が盛んな原三国時代の住居址の実態について、具体的な集落遺跡の事例に基づきながら整理した。

そして、栄山江上流の集落から出土する硬質無文土器を、1～3段階に区分した。1段階は三角形粘土帯土器と共伴する段階で、紀元前1世紀～紀元前後の時期と推定した。松菊里型住居址が退化した無施設型の住居址が、光州地域を中心に営まれるようになる。

2段階は硬質無文土器単純期であり、紀元前後～2世紀中頃と推定した。円形、方形、楕円形などの住居址の平面形があり、竪穴群がある程度群集し、溝状遺構なども確認される。おそらく、消費（居住）と生産という活動領域の区別が発生し、また新昌洞遺跡が対外交易の中心地として浮上する。すなわち、硬質無文土器段階には、中心的な居住空間である平洞遺跡と外部と現地の間での交易の場となった新昌洞遺跡が展開していた。おそらく、これらの遺跡が位置する地域が様々な文物を外部から受容し、それを周辺部へ拡散させる中心的な役割を担ったと考えられる。

3段階は打捺文土器と共伴し、典型的な三国時代住居址の内部から出土する時期であり、紀元後2世紀中頃～4世紀代と推定した。

いまだ、硬質無文土器の資料は、光州や潭陽を中心とした集落遺跡からの出土がほとんどであり、周辺地域の資料が不足している。それゆえに、当該期の集落の景観や、より具体的な伝播過程についての研究には限界がある。そして、硬質無文土器の資料だけではなく、外来物品などの資料がより蓄積されたならば、中国—全南地域（栄山江流域）—日本列島をまたぐ地域間の交流関係がより具体的に解明されていくであろう。

註

- (1)——原三国時代の期間は、韓国考古学会(韓国考古学会 2007)によって提示された、紀元前 100 年から紀元後 200 年までを基準とする。
- (2)——現場説明会や略報告書を参考としており、正式報告書が刊行後により詳細な検討が必要である。

参考文献

- 강귀형 2013 『담양 태목리취락의 변천 연구』 목포대학교 석사학위논문
- 高田貫太 2017 「한반도 서남부와 서일본지역의 교류에 대한 예찰-弥生時代~古墳時代 前期를 중심으로-」 『2017 학술대회 영산강유역 마한제국과 낙랑·대방·왜』 전라남도 문화관광재단·대한문화재단연구원
- 국립광주박물관 1996 『광주 명화동고분』
- 권옥택 2013 『한반도·중국 동북지역 출토 秦·漢代 화폐의 전개와 용도』 영남대학교석사학위논문
- 김승욱 2000 「호남지역 마한주거지의 편년」 『호남고고학보』 11 호남고고학회
- 김장석 2009 「호서와 서부 호남지역 초기철기-원삼국시대 편년에 대하여」 『호남고고학보』 33 호남고고학회
- 김진영 2015 「해남 군곡리폐총 편년 검토」 『전남문화재』 15 집 전남문화예술포럼 전남문화재단 전남문화재단연구소
- 대한문화재단연구원 2016 『광주 신창동유적(사적 제 375 호) 514-1 전 일원 발굴조사 약보고서』
- 대한문화재단연구원 2017 『광주 광산구 도산동아파트 신축부지 내 문화유적 발굴조사 약보고서』
- 동북아지석묘연구소 2016 『송정 1 교-나주시계간 도로확장공사 문화재 정밀발굴조사(3 차) 현장설명회 자료집』
- 동북아지석묘연구소 2018 『광주 월전동 하선·복룡동·하산동유적』
- 목포대학교박물관 1995 『광주 오룡동유적』
- 목포대학교박물관 2016 『해남 군곡리 폐총의 재조명』 해남 군곡리폐총 발굴 30 주년 기념학술대회 목포대학교박물관
- 武末純一 2013 「호남고고학과 일본고고학」 『호남고고학회 20년, 그 회고와 전망』 제 21 회 호남고고학회 학술대회 호남고고학회
- 박순발 2005 「토기상으로 본 호남지역 원삼국시대 편년」 『호남고고학보』 21 호남고고학회
- 이동희 2010 「“호서와 서부호남지역 초기철기-원삼국시대 편년”에 대한 반론」 『호남고고학보』 35 호남고고학회
- 이동희 2017 「호남지역 유적조사 성과를 통해 본 마한·백제」 『백제학보』 제 20 호 백제학회
- 이영철 2005 「영산강유역의 원삼국시대 토기상」 『원삼국시대 문화의 지역성과 변동』 제 29 회 한국고고학전국대회 한국고고학회
- 이영철 2017 「마한 고지의 신자료 성격과 의미」 『2017 학술대회 영산강유역 마한제국과 낙랑·대방·왜』 전라남도 문화관광재단·대한문화재단연구원
- 이지영 2016 「군곡리 토기가마의 성격」 『해남 군곡리 폐총의 재조명』 해남 군곡리폐총 발굴 30 주년 기념학술대회 목포대학교박물관
- 이창희 2014 「군곡리폐총의 연대와 ‘경질무문토기-타날문토기’ 소고-영남고고학의 입장에서」 『영남고고학』 68 영남고고학회
- 장지현 2015 「호남지역 점토대토기문화의 전개양상과 특징-생활유적을 중심으로-」 『호남고고학보』 51 집 호남고고학회
- 전세형 2016 『영산강 상류역 원삼국-삼국시대 취락 연대의 재검토』 경북대학교 석사학위논문
- 전남문화재단연구원 2016 『장성 상무평화공원 조성부지 내 유적 약식보고서』
- 정인성 2017 「마한과 낙랑·대방, 그리고 고조선」 『2017 학술대회 영산강유역 마한제국과 낙랑·대방·왜』 전라남도 문화관광재단·대한문화재단연구원
- 정 일 2016 「군곡리 원형계 주거지의 성격」 『해남 군곡리 폐총의 재조명』 해남 군곡리폐총 발굴 30 주년 기념학술대회 목포대학교박물관
- 최성락 1993 『한국 원삼국문화의 연구』 학연문화사
- 한옥민 2016 「군곡리폐총 연대론 재조명-경질찰문토기를 중심으로-」 『해남 군곡리 폐총의 재조명』 해남 군곡리 폐총 발굴 30 주년 기념학술대회 목포대학교박물관
- 한국고고학회 2007 『한국고고학강의』
- 호남문화재단연구원 2009 『광주 용강·용곡·금곡유적』

호남문화재연구원 2012 『광주 평동유적 I · II -A 구역 · III -B 구역』
호남문화재연구원 2013 『장성 장산리 1 유적』
호남문화재연구원 2015 『장성 장산리 1 유적』

図出典

(いずれも一部改変)

- 図 1 : 김진영 2015
- 図 2 : 동북아지석묘연구소 2018
- 図 3 : 강귀형 2013
- 図 4 : 호남문화재연구원 2013 · 2015
- 図 5 : 전남문화재연구원 2016
- 図 6 : 호남문화재연구원 2009
- 図 7 : 목포대학교박물관 1995
- 図 8 : 국립광주박물관 1996
- 図 9 : 대한문화재연구원 2017
- 図 10 : 대한문화재연구원 2016
- 図 11 · 12 : 호남문화재연구원 2012
- 図 13 : 筆者作成

(大韓文化財研究院, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018 年 5 月 24 日受付, 2018 年 12 月 10 日審査終了)

The Chronology of the Settlements of Early Mahan Period in the Upstream Area of the Yeongsan River and its Significance: Focusing on the Stages of the Hard Mumun Pottery

JUNG Il

In this paper, I examined the chronology of the settlements of the hard Mumun pottery period in the upstream area of the Yeongsan River, which is identifiable as the early period of Mahan, and its significance. First, I presented a suggestion of the chronology of the earthenware excavated from the shell mounds of the Haenum Gungok-ri Mausoleum (Hanyang-gun), a typical compound ruin of this period, based on the existing research results. Next, I examined each of the three stages of hard Mumun pottery in regard to the actual condition of the residential sites of the Three Kingdoms period, which has been a popular topic for discussions in recent years.

In the first stage, hard Mumun pottery coexisted with the triangular clay band pottery, and I estimate it to be from around the first century B.C. to A.D. 1. This is when the settlement sites of a non-facility type, which were a degenerated form of the Songguk-ri settlement sites, were constructed mainly in the Gwangju area.

The second stage is the simplified period of the hard Mumun pottery, and I estimate it to be from around A.D. 1 to the middle of the second century. This is when the plane figures of the residential sites were circular, rectangular, oval, etc.; the groups of pits clustered to a certain extent and the remains of grooves are recognizable. What is noticeable is the existence of the Hon-dong ruins, which were the central living space, and the Shinchang-dong ruins, which were the center of foreign trade. It is thought that the location of these ruins probably played a central role in the assimilation of various cultures from outside and in spreading them to the surrounding areas.

The third stage is the period when the hard Mumun pottery was excavated alongside the textile-printed pottery from typical settlements of the Three Kingdoms period, and I estimate it to be from around the mid-second to the fourth century A.D.

The materials of the hard Mumun pottery are still mostly excavated from the settlement sites centered on Gwangju and Damyang, and there is a lack of materials concerning the surrounding areas. Therefore, there is a limit in doing research on the landscape of the settlements of this period and the process of the propagation in more detail. However, if more data is accumulated through future surveys, there is a high possibility that the research will progress rapidly.

Key words: Early Mahan period, hard Mumun pottery, textile-printed pottery, chronology of the settlements